

## 女性労働とシスターフッド

### ■選者紹介

#### 辻 智子 (つじ ともこ)

北海道大学大学院教育学研究院教授

【専門】教育学 (青年期教育・社会教育)、  
女性史

#### 水溜真由美 (みづたまり まゆみ)

北海道大学大学院文学研究院教授

【専門】日本近代文学・思想史

### ■選者の著作

辻 智子・水溜真由美編著『労働をめぐるシスターフッド：プロレタリア文学・フェミニズム・労働研究』北海道大学出版会、2025年

多くの女性にとって、生きることは働くことでもあった。戦間期における女性労働の多様化は女性たちの中に分化と序列を生んだ一方で、その立場の脆弱性を浮き彫りにした。女性たちはこの状況にどう向き合ったのか。「文学」「運動」「研究」の分野で活躍した7名の女性と「無名」の女性労働者たちに光をあて、労働が媒介した女性同士の連帯の一端を明らかにする。

定価：4,950円 (本体価格 4,500円＋税)  
ISBN：978-4-8329-6903-2



### ■選書リスト

#### 01 森崎和江著『まっくら：女坑夫からの聞き書き』岩波書店 (岩波文庫)、2021年

戦前の筑豊炭田では、男性と女性がペアになって坑内で採炭労働に従事していました。本書は、戦前に坑内労働に従事した女性たち11人からの聞き書きです。坑内労働は危険で過酷な肉体労働でしたが、本書の聞き書きから、女性たちが坑内で働くことに強い誇りを持っていたことがうかがえます。女性

労働者の肉声を再現する本書は、オーラルヒストリーの先駆的な著作としても高く評価されています。(水溜)

定価：880円 (本体価格 800円＋税)  
ISBN：978-4-00-312261-7

#### 02 佐多稲子著／佐久間久子編『キャラメル工場から：佐多稲子傑作短編集』筑摩書房 (ちくま文庫)、2024年

佐多稲子は小学校5年生の時に通学をやめてキャラメル工場で働き始めました。本書の表題作はその経験に基づいて書かれた短編小説です。当時、キャラメルを食べていた豊かな家庭の子供たちは、貧しい家庭の子供たちが毎日工場に通ってキャラメルを紙に包んでいたことを想像すらしていなかったと思います。主人公のひろ子が便所の中でこっそり涙を流すラストシーンがとてつもないです。(水溜)

定価：968円 (本体価格 880円＋税)  
ISBN：978-4-480-43940-6

#### 03 山川菊栄著／鈴木裕子編『山川菊栄評論集』岩波書店 (岩波文庫)、1990年

マルクス主義フェミニストの山川菊栄は、大正期に娼妓論争や母性保護論争において舌鋒鋭い論客として頭角を現しました。いずれの論争においても、山川の姿勢は女性労働者の困難な状況を社会科学的な観点から把握しようとする点において一貫しています。1920年代には、女性労働者には男性労働者とは異なるハンディがあるため、階級闘争の観点だけでは女性労働者の状況を十分には改善できないと明快に主張しました。(水溜)

定価：1,210円 (本体価格 1,100円＋税)  
ISBN：978-4-00-331623-8

#### 04 徳田秋声著『あらくれ・新世帯』岩波書店 (岩波文庫)、2021年

徳田秋声は一般庶民の女性を描くことが得意な作家です。『あらくれ』の主人公であるお島は、結婚に失敗した後、職業遍歴を経て、やがて再婚した夫と共に洋服屋を開業して成功します。『あらくれ』の初刊は1915年、「職業婦人」という言葉がささやかれ始めた時代でした。戦後、成瀬巳喜男監督によって制作された映画『あらくれ』では、高峰秀子が勝ち気で働くことのお島を好演しました。(水溜)

定価：935円 (本体価格 850円＋税)  
ISBN：978-4-00-310227-5

#### 05 桐野夏生著『OUT (上・下)』講談社 (講談社文庫)、2002年

近年、女性活躍推進が謳われていますが、今日においても女性労働のかなりの部分を占めているのはパート労働や非正規労働で

す。本書は深夜の弁当工場でパートとして働く主婦たちの中で発生する陰惨な事件を描く長編小説です。物語の中で、主婦たちの「シスターフッド」は、犯罪の共犯者として、この上なく強固なものとなります。けれども、却ってそのことは希望のない日常を送る彼女たちの孤独の深さを浮かび上がらせます。(水溜)

〈上巻〉定価：924円 (本体価格 840円＋税)  
ISBN：978-4-06-273447-9

〈下巻〉定価：792円 (本体価格 720円＋税)  
ISBN：978-4-06-273448-6

#### 06 牧原憲夫著『山代巴 模索の軌跡』而立書房、2015年

山代巴はコミュニストの作家です。戦後は故郷広島を農村を中心に文化運動に関わり、農村女性の生涯を書いた『荷車の歌』などの作品を残しました。左翼運動と言えば、教条主義的な理念を振りかざす傾向が強かった時代に、山代は、どうすれば沈黙を強いられている女性たちが心を開いて本音を語れるようになるのか試行錯誤をくり返しました。本書は92年にわたる山代の生涯を丹念にたどり、模索の軌跡を明らかにした労作です。(水溜)

定価：2,640円 (本体価格 2,400円＋税)  
ISBN：978-4-88059-383-8

#### 07 松村喬子著／山家悠平編集・解説『地獄の反逆者 松村喬子遊廓関係作品集』琥珀書房 (こはく文庫)、2024年

1920年代の日本では、娼妓運動の盛り上がりや背景として、娼妓による自由廃業の動きが活発化しました。名古屋の中村遊廓の娼妓だった松村喬子も遊廓から逃走して自由廃業しました。本書は、その経験に基づいて書かれた小説ですが、松村が遊廓の中で孤立した存在でなかったことがわかります。助け合いながら楼主に抵抗する娼妓たちの姿に力強いシスターフッドを感じ取ることができます。(水溜)

定価：2,530円 (本体価格 2,300円＋税)  
ISBN：978-4-910993-57-7

#### 08 金賛汀著『朝鮮人女工のうた：1930年・岸和田紡績争議』岩波書店 (岩波新書)、1982年【品切】

戦前日本の繊維産業部門では多くの女性が働いていたことが知られていますが、その中には多くの朝鮮人女性も含まれていました。中でも大阪・泉州の岸和田紡績は、日本の紡績工場の中で最も多くの朝鮮人女性労働者を雇用したとされています。本書は1930年代に発生した争議を含めて、岸和田紡績で働いた朝鮮人女性の姿を描き出すルポルタージュです。戦前日本の底辺社会を生き延びた朝鮮人女性の歴史をよみがえらせるために、苦労して記録や関係者を探す著者の姿

にも心を打たれます。(水溜)  
 定価：512円 (本体価格466円+税)  
 ISBN：978-4-00-420200-4

**09 福永操著『あるおんな共産主義者の回想』れんが書房新社、1982年【品切】**

本書は東京女子大学在学中から左翼運動にコミットした福永操の回想録です。戦前の左翼組織は、高い学歴の持ち主であっても、女性運動家に対して高い知的能力を必要としない補助的な任務を割りあてました。本書において福永は、左翼組織や男性運動家の女性蔑視的な体質を痛快といってよいほどに厳しく告発しています。本書は、家族との関係や国家による厳しい弾圧を含めて、戦前の左翼運動に参加した女性の証言として大変貴重な作品です。(水溜)  
 定価：2,530円 (本体価格2,300円+税)  
 ISBN：-

**10 関 礼子著『姉の力 樋口一葉』筑摩書房、1993年【品切】**

樋口一葉は満15歳の時に家督を相続して戸主になりました。「職業作家樋口一葉」は、一家の大黒柱となった一葉が様々な職業を模索する中から誕生しました。性分業が浸透する近代社会において、もてはやされる女性の力は私的領域で発揮される「妹の力」であることが少なくありません、本書は、こうした風潮に抗して、樋口一葉を「はたらく女」としての「姉の力」を発揮した女性として捉え直す優れた評伝です。(水溜)  
 定価：1,549円 (本体価格1,408円+税)  
 ISBN：978-4-480-05194-3

**11 川田文子著『農漁村女性の記録 女たちが語る歴史(上)北海道・東北・上信越他篇』『戦争と性』編集室、2023年**

明治生まれの女たちの聞き書きが多数収録されています。著者は、1970年代に全国各地の農山漁村をたずね歩き、女たちがどのように生きてきたのか、その語りに耳を傾けました。働くこと、子を産むこと、育てること、食べてゆくことは容易ではなく、多くの場合、苦労の連続でしたが、その語りからは、たくましさとすがすがしさも伝わってきます。戦争中の体験談も生々しく「満州」からの引き揚げの語りは貴重な歴史証言です。現代へとひき継ぐべき貴重な復刻。下巻である、『うない(女性)の記録 女たちが語る歴史(下)沖縄篇』『戦争と性』編集室、2023年)もおすすりめしたい。(辻)  
 定価：2,420円 (本体価格2,200円+税)  
 ISBN：978-4-902432-27-5

**12 野依智子著『近代筑豊炭鉱における女性労働と家族：「家族賃金」観念と「家庭イデオロギー」の形成過程』明石書店、2010年**

かつて炭鉱の中で働いた女たちは、いつ、どのようにしてそこから姿を消したのでしょうか。本書は、坑内保育所の存在に着目し、多くの一次資料を用いて、それがどのように成立

し広がったのかをたどり、炭坑主婦会の生活改善運動や安全運動と「主婦」「家庭」「母性」といった観念の浸透の関係を明らかにしていきます。就労と育児の両立、労働と家族の関係のとらえなおしを目指す、著者の博士論文です。(辻)  
 定価：4,950円 (本体価格4,500円+税)  
 ISBN：978-4-7503-3142-3

**13 山家悠平著『生き延びるための女性史：遊郭に響く〈声〉をたどって』青土社、2023年**

遊郭に生きる女性たちが書いた日記や小説から、その〈声〉をたどり、犠牲者イメージのみに集約されない、複数のアイデンティティを生きる彼女たちの姿をとらえようとした、意欲的な論文集です。相手を「対象化」しないとの問題意識は、同一著者の小説『楊花の歌』(著者名は青波杏、集英社、2023年 / 2025年集英社にて文庫化)に見事に表現されていますので、そちらもあわせて読むことをお勧めします。(辻)  
 定価：2,640円 (本体価格2,400円+税)  
 ISBN：978-4-7917-7576-7

**14 石月静恵・大阪女性史研究会編著『女性ネットワークの誕生：全関西婦人連合会の成立と活動』ドメス出版、2020年**

大正期半ば、2府23県からの182人が発起人となり女性たちのネットワーク、婦人会関西連合会(のちに全関西婦人連合会へと改称)が結成されます。大会には2500人超が結集し、女性たちの経験から生活の問題を広く社会に発信しました。地域婦人会、女学校同窓会、女子青年会、仏教婦人会など働く女性から主婦まで様々な人々が連なっていたのは興味深いです。本書は女性史研究グループによる論文集で、筆者たちのネットワークの姿も重なってさらなる関心を誘います。(辻)  
 定価：3,740円 (本体価格3,400円+税)  
 ISBN：978-4-8107-0850-9

**15 細井和喜蔵作『奴隷：小説・女工哀史1』『工場：小説・女工哀史2』岩波書店(岩波文庫)、2018年**

よく知られている『女工哀史』の著者・細井和喜蔵の自伝的小説です。『奴隷』は、京都・加悦町での機屋小僧時代の見聞が、『工場』は15歳で大阪へ出た後に働いた紡績工場での機械工時代の経験がベースになった、リアリティあふれる物語です。過酷な労働と生活とともに労働運動の萌芽期におけるエネルギーな運動の様相と女性たちの力強さもまた表現されています。細井の妻で、紡績工場の「女工」だった、高井としをによる自伝『わたしの「女工哀史」』(草土文化、1980年刊 / 岩波文庫、2015年刊)もぜひあわせてお読みいただくことをお勧めします。(辻)

〈1〉定価：1,386円 (本体価格1,260円+税)  
 ISBN：978-4-00-331352-7  
 〈2〉定価：1,386円 (本体価格1,260円+税)  
 ISBN：978-4-00-331353-4